OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 中国人の日本観 ： 歴史と現在 |
| Author(s) | 王, 暁秋; 胆, 紅 |
| Citation | 国際公共政策研究. 2007, 12(1), p. 303-312 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/9547 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

＜講演＞

# 中国人の日本観
## —歴史と現在—

# Past and Present Attitudes of the Chinese toward Japan

講演者：王　暁秋*
訳　者：胆　　紅**

WANG Xiao-Qiu*
DAN Hong**

**Abstract**

Wang Xiao Qiu is professor at Peking University, and one of the most well-known scholars of the history of cultural relations between China and Japan. This paper is the transcript of a lecture he delivered here at OSIPP on October 30, 2006 as part of Seminar of International Public Interest through the "Initiative of Attractive Educational Program".

キーワード：日中文化交流

**Keywords**：cultural relations between China and Japan

* 北京大学歴史系教授
** 日本学術振興会特別研究員、大阪大学大学院国際公共政策研究科博士後期課程

**【訳者序言】**

ここに翻訳したのは、王暁秋・北京大学歴史系教授が本研究科でおこなった中国語による公開講義（日本語訳つき）の原稿である。講義は2006年10月30日（月）の午後4時半から、本研究科会議室で開催された。今回の講義は、王教授の来日の機会を利用して、本研究科の米原謙教授の依頼にもとづき、「魅力ある大学院教育イニシアティブ」の「国際公益セミナー」の一環としておこなわれたもので、約40名の学生が出席した。

まず王教授について紹介する。日中文化交流史研究の第一人者として著名な王教授は、同大学の中外関係研究所長、全国政治協商会議委員、中日関係史学会副会長などを併任されている。また国際日本文化研究センター、東京大学、高麗大学、パリ高等師範学校などで客員教授を歴任された。著書は『中日文化交流史』（中華書局、1992年）、『中日文化交流史話』（日本エディタースクール出版部、2000年）『近代中国与日本——他山之石』（高麗大学出版部、2002年）、『近代中国与日本——互動与影響』（崑崙出版社、2005年）など多数ある。

講演の内容は古代、近代、現代という三つの時期に分けられ、それぞれ代表的な中国人の日本観が紹介された。講演によれば、古代の中国は世界で最も早くから日本を認識した国家であるが、その認識の進展は極めて緩やかだった。一世紀の『漢書』から始まり、『清史稿』まで十六部の官修正史などを紹介し、古代中国人の「仙島神州」という日本イメージが呈示された。そしてアヘン戦争後の近代に入り、中国の日本研究は、"走馬観花"（通り一遍の観察）から、実地調査に基づいた深い考察に推移したと言う。日清戦争後、日本に学ぶ風潮があった一方、日本の軍国主義に対する批判そして全面的に日本を認識しようとする動きも生まれた。最後に1945年の終戦後から現代に至るまでの中国人の日本観が、国家指導者の認識や世論調査に基づいて紹介された。

王教授が今回のセミナーで講演されたのは、単に現在の日中関係が冷え切っていることもあって、日中関係を考えるよい機会となった。会場から、「靖国神社」をめぐる問題、日中両国の関係は今後どのような方向で発展していくと予想するか、などの質問があった。歴史上の日中関係の一面を照らす講演会だった。

【翻訳】

# 中国人の日本観—歴史と現在

北京大学教授　王　暁秋

中国人の日本観とは、中国人が日本をどうみるかの問題です。すなわち日本に対する認識と観念のことです。こうした認識は、中日両国の国内事情と両国の関係の変化によって変るものであり、また、それは中日関係の発展上、重大な影響をもたらすものです。いまから、自分の研究に基づき、古代から現在までの中国人の日本観の変遷について簡単な考察と分析を行います。

## Ⅰ　古代中国人の日本観

古代中国人の日本認識に遡って、簡単に概括すると、二つの特徴があると思われます。

**1**　一つは、中国が日本を認識した最初の国だということです。紀元1世紀で完成された『漢書』の中に、すでに「夫楽浪海中有倭人、分為百余国」という日本に対する明確な記載があります。紀元3世紀につくられた『三国志』の中の『魏志・倭人伝』で、さらに日本列島の政治・経済・社会・習俗について二千字近くの説明が行われています。それは今日に至るまで、日本の上古の歴史を研究するための最も重要な文献資料とされてきました。以後、中国歴代史書の中で、日本に対する記載も絶えませんでした。中国の文人や詩人も、日本及び日本人に関係する文章と詩歌を書きました（李白、王維など)。『三国志』から『清史稿』にいたる16部の正史のなかには、「倭人伝」とか「倭国伝」と呼ばれる「日本伝」という部分があります。

**2**　こうした事実にもかかわらず、他方では、古代中国人の日本に対する認識の進展はきわめて緩慢なものでした。その原因を分析しますと、一つは、中国古代の経済文化は比較的に発達しており、一般の官僚や知識人が中華思想と華夷秩序に影響され、日本を「東夷の小国」だと考え、まともに日本への理解と研究に真剣な力を注ぎたくなかったのです。もう一つは、中日両国は一衣帯水の臨邦で二千年以上の文化交流の歴史があったにもかかわらず、古代に海を渡ること自体が相当困難でかつ危険なことでした。従って中国の官僚や文人学者の中で、日本へ赴き現地考察を行った者は僅かしかいませんでした。(古代に日本へ行ったことがある中国人は、主に商人と僧でした)。

**3**　こうして中国の古書の中では、日本はしばしば雲を掴むような茫漠として限りない仙島神州（海外三神島）だと書かれ、恣意的に神秘と想像の色彩が付けられていました。正史の中の日本伝も旧説をそのまま受け継ぎ、皮相な理解でした。しかし明代になって和寇へ対応するため、日本を

紹介する著作がつぎつぎに現れました。例えば、薛俊（せつしゅん）の『日本考略』、候継高の『日本風土記』、李言恭と郝杰（かくけつ）の『日本考』、鄭舜功（ていしゅんこう）の『日本一鑒(かん)』などです。しかし、これらの内容も比較的に簡単で、深く研究されたとは言えません。ただ、注意すべきところは、これらの本の中に日本語の単語が記載されていることで（「寄語」と呼ばれています）、しかも、その日本語の中国語読みもつけられ、最初の「日漢辞典」となったのです。日本古代の言語を研究することもできます。総じて言えば、清朝の半ばまで、中国人の日本に関する知識はきわめて乏しいです。例えば、乾隆（けんりゅう）年間、私人が貨幣を造ることは禁じられていました。沿海である人が一枚の日本「寛永通宝」の銅銭が発見しましたが、朝廷の文武、各省の官吏たちで、それが何かを知る人は一人もいませんでした。朝廷は、誰かが無断で貨幣を造って悪いことを企てていると考え、厳しく追及するように命令したのです。日本に対する無知の程度は、この例から見てお分かりいただけますでしょう。

## Ⅱ 近代中国人の日本観

**1** 近代中国の歴史は1840年のアヘン戦争からはじまりました。アヘン戦争後、何人かの開明的な知識人が世界に目を向け始め、世界各国の歴史地理を研究し紹介しました。しかし、彼らの注目の重点は中国を侵略している西欧列強にあり、東亜の近隣国である日本は未だ重視されていませんでした。徐継畬の『瀛環志略（えいかんしりゃく）』と魏源の『海国図志』のような当時の名著は、日本に伝わって大きな影響を与え、日本でも多くの翻刻や翻訳本が出されました。しかし、この二つの著作は日本に対する認識が曖昧で、日本は主として対馬、長崎、薩摩の三大島からなると捉えている状態でした。

**2** 19世紀60-70年代に、中国人が日本に注意を引かれ始めたのは、三つの事件がきっかけでした。すなわち、1868年の明治維新、1871年の「中日修好条規」の調印、1874年の台湾出兵です。特に、台湾出兵は、中国の士大夫を驚かせました。意外にも「東夷の小国」の日本さえ中国を侮るようになるとは、いったい日本国内にどんな変化が起こったのでしょうか？ 彼らは注意深く日本のことを知りたくなったのでした。

私が見た中国人の明治維新に関する最初の論評は二つあります。一つは、1874年陳其元が著した『日本近事記』です。彼は明治維新を不法に権力を奪い取った王朝交代だとみなし、幕府の将軍を日本国王と誤認し、天皇が再び政権を握ったことを「国を奪ったもの」として排斥しました。彼はまた、出兵して、幕府が旧政権を復活させるのを助けようとさえ主張しました。もう一つは、同年、金安清が著した『東倭考』です。明治維新とは天皇が再び政権を握ることで、中国古代の変法に比することもできるとし、彼は明治維新を承認し肯定しました。

1874年12月10日、李鴻章は皇帝への上奏文において明治維新に対する見解を示しました。彼は洋

務派の立場から、明治政府が積極的に西洋の軍事や工業技術を学び、留学生を派遣したりしたことを賞賛しました。しかし、李鴻章は日本が行った政治制度及び服装、法律の面の変革に対しては反感を抱き、また日本がこれによって「東方の一方の旗がしらたらん」とし、中国を軽視することに対しては、秘かに憂えていたのです。

### 3　19世紀70-90年代

「中日修好条規」が調印された後、中国の官吏、文人たちが次々に日本に来るようになりました。百聞は一見に如かずで、日本についての実地考察を通じて、近代の中国人は次第に従来の見解を深めていったのです。例えば、明治維新後、日本を実地調査した最初の中国人官僚は浙江税関官吏の李圭です。1876年、彼は命ぜられてアメリカ建国百年記念博覧会に参加しました。彼はその途中日本を訪ね、長崎、神戸、大阪、横浜などの地を遊覧しました。明治維新後の新たな気運は彼に深い印象を与えました。李圭は『環遊地球新録』という本を書き、明治維新は日本が弱国から強国へ変わっていく歴史発展の一つの転換点だと考えました。

1877年、最初の駐日公使の何如璋は、赴任日記『使東述略』の中で、彼の日本についての見聞を語っています。彼は、明治維新の成果を肯定すると同時に、変法は必ず大きな障害に遭うだろうと予測しました。したがって、維新が成功するかどうかについては懐疑の念を抱いていました。

中国が日本に公使館や領事館を設置したあと、中国の官僚や文人が次々と日本にやってきました。彼らは日本各地を遊覧して日本人と広く往来し、多くの旅行記や詩歌を書きました。彼らは維新後の進歩を見聞し、その著作の大多数は明治維新に同情と賞賛を表明しています。例えば、1879年に訪れた王韜の『扶桑日記』と王之春の『東遊日記』は、いずれも維新後に作られた鉄道・電信・電話などがもたらした利便は、「非常にうまく作られていて、目も眩むばかりだ」と書いています。しかし、頑固に守旧的な立場にたつ保守的な官吏や文人たちは、色眼鏡をかけて日本を観察し、維新のいたるところに文句をつけています。とくに、日本が西洋に学んだことに対して、甚だ不満でした。例えば、1880年に訪日した李筱圃は『日本紀遊』の中で、日本は維新改革後、極力西洋のやり方をならった結果、国家は貧しくしてしまったと指摘しました。また、別の人は、日本には重大な政治経済的危機が潜在していると考え、明治維新は失敗するだろうと考えました。これらの人は、日本に対して、「馬上の花見」のイメージをもっていました。つまり、おおざっぱに物事の表面だけを見たので、印象が薄くてすぐに消えてしまったのです。

19世紀の80年代から、若干の駐日公使官員と日本考察のために派遣された官僚は、日本の歴史と現状に対して比較的広汎かつ深い調査研究を行っており、ある程度分量も価値もある著作を残して、近代中国人の日本に対する認識の進歩を反映しています。例えば、駐日使館に勤務した姚文棟は、日本の地理について『日本地理兵要』(1884年) を書きました。随員の陳家麟の『東槎聞見録』は、明治維新の各項目の改革には利もあれば弊害もあると考え、区別して分析しています。彼は、学校を建て、鉱業を整備し、鉄道を開き、銀行を設けたことなどは、「利のある善政」であり、服色を

変え、漢字を廃し、刑罰を改め、紙幣を作ることなどは「弊政」だと述べています。おそらく、こういう見方は、当時の中国の知識人一般の明治維新に対する、比較的代表的な見方だったといえるでしょう。

1887年日本考察のために派遣された二人の官僚は、日本についての詳しい調査報告を書きました。傅云竜の『遊歴日本図経』と顧厚焜の『日本新政考』です。これらの本は、中国人に日本を理解させるための具体的で豊富な資料を提供しました。

当然のことですが、日本についてもっとも全面的な研究を行ったのは、第一回駐日大使館参事官だった黄遵憲をあげなければなりません。彼は日本にいた5年間、日本各方面に関する資料を大量に収集し、日本に関する200首にのぼる詩歌を『日本雑事詩』として編成しました。そして彼は、1887年に『日本国志』という大著を完成しました。この書は計40巻、50万字、12種の誌もあり、各方面から日本の歴史と現状を紹介し、中国近代の日本研究の集大成の代表作と言われています。『日本国志』は日本の制度の研究に重点を置いており、その目的は明治維新の経験と教訓をまとめ、中国の維新変法のための参考に供しようとしたものです。

### 4 19世紀90年代から20世紀初め

一千年もの間、日本人は中国を師として敬い、中国から多く学びとってきたのに、近代に入って半世紀もたたぬうちに、今度は中国人の方が日本からあわてて教えを乞わねばならなくなったのです。このような逆転が生じた鍵は、日本の明治維新の成功にあり、変化の転換点は、1895年の日清戦争での中国の敗北と「下関条約」の調印でした。中国の多くの愛国的知識人は、一方では日本の侵略に反対し、「下関条約」の締結を大いなる恥辱とみなし、ひどく心を痛めました。同時に、彼らは、なぜ日本は中国に勝つことができたのか、また、中国はどうやって生存できるのかを真剣に考えました。康有為ら維新派の人々は、日本が日清戦争で勝利した原因を、すべて維新変法に求めました。維新派は次のような結論を出しました。すなわち、中国を救うにはただ変法維新あるのみで、そして維新を行うには西洋に学ばねばなりません。日本は西洋に学んで大いに効果をあげ、明治維新に成功させ、富国強兵を実現させたのですから、どうして中国人が昨日の敵である日本に学べないことがあるのでしょうか？ こうして康有為は、結論として「強敵を以て師と為すを妨げず」というスローガンを明確に打ち出したのです。維新派の人々は、明治維新に関する本や文章をたくさん書きました。特に1898年、維新派の推進下で、光緒帝が「百日維新」を実施したとき、康有為は自身が編纂した『日本変政考』を光緒帝に上呈しました。この本は、編年体の形式で明治維新の改革の各項目を叙述し、その利弊得失を論じ、また中国の情況に結びつけて、中国での変法の提案をしました。彼は全面的に日本に学ぶことを主張し、「我が国の変法はただ日本に倣えば、すべて十分である」と公言しました。また、光緒帝は読後、非常に啓発されて維新を模倣することを決意し、一連の命令を下しました。しかし、当時中国では頑固な守旧勢力が強すぎで、結局、西太后が政変を起こして、戊戌変法はわずか103日で失敗に終わったのです。

戊戌変法は失敗しましたが、20世紀初めに八国連合軍に侵入されてから、清朝政府は、清の統治を維持するために改革を実行せざるをえませんでした。それは「清末新政」と呼ばれました。日露戦争後の1905年、清政府は、また「予備立憲」を開始しました。これらは、すべて日本を手本として、全面的に日本を模倣した改革様式です。ですから、たくさんの青年学生たちを日本に留学させるほか、官僚文人たちも視察のために日本に派遣しました。政治、経済から軍事、司法、教育までの各方面への考察結果として、報告や遊記がたくさん書かれました。日本が富強な国になった道を検討し、日本から何を学び、そしてどのように学ぶのかが問題として提出されました。ある論者は「工商業の振興こそ富国の大本」と主張し、ある論者は「まず交通、つぎに工業、第三は軍事制度を改革すること」といいました。またある論者は「教育第一、工業第二、兵は第三」だといい、改革の重点は教育に置かれました。さらに別の論者は、日本を完全なユートピアに描きあげました(「野に曠土無く、国に遊民無く、人にして学ばざる者無く、学んで精ならざる者無し」というわけです)。

## 5　20世紀初めから20世紀20年代

日本社会への認識の深まりとともに、中国人の中に日本を批判し、あるいは全面的に日本を認識しようとする動きが生れました。とくに日本で長期生活あるいは留学している学生は、祖国が貧弱のために、日本で蔑視され、侮辱を受けざるを得ませんでした。かれらは弁髪のまま中国の服装を着て街で歩いて、日本の子供に後ろから「豚の尻尾」と呼ばれたことさえありました。日本政府も中国留学生に対し、1905年に発表された取締規則などのような、各種の差別政策を実施しました。これは留日学生の民族感情を強烈に刺激し、彼らの愛国革命の熱情を激発させました。留日学生たちは、各種の刊行物を発行し、大量の日本書籍も翻訳しました。愛国、革命を鼓吹し、中国人むけの日本事情紹介などを通じて日本への認識がさらに深まりました。

日清戦争後、日本の軍国主義の害悪がさらに強まり、中国への侵略がさらに深まりました。八カ国連合軍に積極的に参加し、中国の土地で日露戦争を起こして、1915年に袁世凱が皇帝を名乗ったのを利用して、中国を独占的な植民地にしようとする対華21か条約を提出しました。日本の侵略は中国人の日本に学ぶという夢を壊していったのです。進歩的な中国人たちは、徐々にめがねを拭いて幻想を捨て、日本に対する認識を新たにし、日本社会に存在する問題と中国への侵略政策を暴露し、批判し始めました。

現在のところ、比較的早い時期に、近代中国人が日本帝国主義に対する批判を行った文章は、留学生によって発行された無政府主義の刊行物『天義報』の中にある劉師培の「亜州現勢論」です。この文章は、日本帝国主義政府を「亜細亜の公敵」だと明言しました。また1915年に日本が21か条を提出したとき、日本に留学していた李大釗(りたいしょう)は中国の留学生総会を代表し、「全国同胞への警告書」を起草し、日清戦争以来の日本の侵略の罪行を列挙しました。1917年と1919年、李大釗は日本帝国主義が鼓吹する大亜細亜主義を批判する論文を書き、それが実質上は弱小民族を

併呑する帝国主義で、アジア各国を侵略する軍国主義だと認めたのです。1919年8月、戴季陶は『私の日本観』を発表し、日本の侵略政策の根源を暴露し、次のようにいいました。「私には一つの願いがある。私の思考と批判能力で、日本という題目を中国人の前にはっきり解剖して、もう一度元のように戻してみせることである。」1928年、彼は『日本論』を出版して、日本に対する深い分析を行いました。

孫文は、かつて辛亥革命のための基地として日本を利用し、多くの日本人と密接な関係を持っていましたが、日本の中国侵略の拡大に伴って、彼は1924年11月、神戸を訪れて講演したとき、日本政府に対し、日本は今後「西方の覇道の番犬となるのか、それとも東方の王道の干城となるのか」と詰問しました。

### 6 1931年ー1945年の日中戦争期

1931年に九・一八事変（満州事件）が起こってから、日本帝国主義は中国に対し、14年も続く侵略戦争を起こし、中華民族の抗日救国運動を惹き起こしました。日本帝国主義は、中国の土地で中国人を殺戮し、中国の町や村を焼き払い、財貨や富を奪い、婦女を強姦し脅して慰安婦にし、労働者を強制連行して鉱山で苦役させ、また化学兵器を使用したり細菌戦を行ったりしました。中国人民に空前の民族の災難と非常な苦痛を与えました。被害者としての中国人民の日本侵略者への反対と痛恨には理由があり、それは理解すべきでしょう。したがってこの時期の中国人の日本に関する文章と著作はほとんど、日本の帝国主義の侵略を暴露、告発、批判することでした。例えば、王芸生の『六十年来の中国と日本』（天津大広報出版、7巻）や各種の日本の中国侵略に関する歴史書がそれです。

## Ⅲ 現代中国人の日本観（1945年ー現在）

### 1 1945ー1949年

1945年8月、日本の戦敗によって中日戦争が終わり、日中両国の半世紀近くの侵略と被侵略の関係に終止符が打たれました。また、東京裁判で戦犯へ国際審判も行いました。当時中国は国共内戦に陥り、また国際上、米ソが対立し冷戦状況が形成されたので、中国人の日本への関心は比較的少なかったのです。しかし、中国人民は、終始侵略戦争の責任が日本人民ではなく、日本の軍国主義の統治者にあると考えていました。戦後、中国は大量の日本人捕虜と在留者を日本に帰還させました。また、中国の東北の民衆は、過去のことを恨まずに日本の戦争遺留孤児を養育しました。彼らの中には、成人後、日本に戻った人もいます。

### 2 1949ー1972年

1949年の中華人民共和国成立によって、中国人は独立、平等の立場で日本と対応できるようにな

りました。しかし、当時日本政府はアメリカの支持のもとで、中国を敵視し、孤立させる政策を取り、中日国交は回復されないままでした。この間、中日両国の有識者たちは、両国間の不正常な状態を打開するために、各種の民間経済や文化交流を通じて、中日関係の改善に多大な努力をしました。しかし、この間、中日の交流は比較的少なく、中国人の日本に関する研究も少ない状態でした。中国人の主な関心は日本人民の民主主義運動と反米闘争を支持することでした。同時に、日本政府の反中国政策と軍国主義復活運動に警戒感を示し、批判も行いました。日本人民との友好と人道主義精神の立場から、1953年から中国政府は数万人の在留日本人の帰国を実施し、また1955年、1千名余りの戦犯を釈放しました。1965年500名余りの日本青年を中国訪問させ、毛沢東主席と周恩来総理も自ら彼らと会見しました。

### 3　1972年ー1978年　中日国交回復と『中日平和友好条約』

中日両国の有識者たちの長期の努力、そして、国際情勢の変化（米国大統領ニクソン訪中）により、1972年に田中首相の訪中が実現し、中日『共同コミュニケ』を発表し、中日両国の国交回復が実現しました。こうして中日両国の80年近くの敵対と不正常な関係に終止符が打たれ、中日両国の友好関係を作る条件が整えられました。中国政府は中日両国人民友好の立場から出発し、日本人民の負担を軽減するため、戦争の賠償請求を放棄することを決定しました。(周恩来総理は談話で、つぎのように語っています。中国は日本の侵略戦争の被害者なので、賠償をもとめることは当然の権利ですが、中国人はかつて日清戦争後の賠償条約や21か条条約の賠償条約で苦しい経験をうけましたから、同じ苦しみを日本の人民に与えたくないのです)。かつて戦争で多大な苦難を受けた中国人民大衆のなかには、それを納得しない人もいましたが、大局を念頭に置きながら、日本との国交回復と賠償請求放棄という中国政府の決定を支持することにしました。しかし、当時、中国は文化大革命期で、外にむけて開放されていず、中日交流も少なかったのです。1976年、文化大革命が終わり、1978年、中日両国は中日平和友好条約を締結し、中日友好協力の新しい時期を迎えました。

### 4　20世紀80ー90年代中期　中日友好交流のムード

1978年以後、中国は改革開放を実施し、日本経済は高度に発展して、世界第二の経済大国となりました。中日両国の間に経済、文化、科学技術の方面などでの交流と協力が頻繁に行われるようになり、中国人の日本留学もブームとなりました。こうした背景の下で、日本への見方が見直され、多くの中国人は日本に対し積極的な肯定的な見方をもつようになりました。日本は戦争の廃墟の上に富強の現代的国家を建設したので、その経験は中国にとって大いに参考になると考えました。日本人に対して好感をもち、勤勉、真面目、進取心、日本製品の質の高さなどに高い評価を下しました。1988－1995年の世論調査で、日本が好き、あるいは親近感をもつという中国人の割合は50％以上に達しました。

**5　20世紀90年代中期から21世紀初、中国人の日本観は微妙に変化しました。**

これは、90年代中期以後の中日両国の国内事情と国際情勢の変化に大いに関係があります。日本国内では、経済は不景気、政治は急速に保守化し、意識形態上も新保守主義、民族主義の思想が台頭して、中国の経済発展と国力の急速な発展、国際的地位の上昇に一種の不安感をもっています。こうして中日間の矛盾と摩擦が不断に現れ、とくに歴史認識の問題がますます中日両国関係の難問となりました。一部の日本の政治家や右翼勢力は、日本の中国やアジアへの侵略戦争の歴史を否認しようとし、甚だしい場合は美化しようとしました。小泉前首相は、A級戦犯が祀られている靖国神社への参拝を頑固に固持しつづけました。

こうした情況の中で、中日関係に「政冷経熱」という現象が現れました。中国人の日本に対する見方も変わってきました。日本への友好度合い、親近感も低くなった一方、日本の政治家への不信感と批判が高まってきました。世論調査によれば、日本が好きだという中国人の割合は、2000年には10％まで低下し、さらに2005年には5.3％になりました。歴史問題への態度や小泉の靖国参拝への不満は、95％以上に達しました。たいていの中国人はつぎのように考えています。日本は歴史を直視し、歴史の事実を尊重して、侵略と被侵略の是非をはっきり見分けるべきです。歴史を改竄抹殺したり、さらに是非を転倒し、侵略が国益にかなっているなどと説いてはなりません。「歴史を鑑とし、未来を迎える」というのが中国人の一貫した主張です。歴史を勉強することは、古い恨みを晴らすためでもなければ、報復をするためでもありません。悲劇を再度くり返すことを避けるためです。戦争賠償の放棄、戦争孤児の扶養、日本に対する理性的態度の要求などの事実が証明しているように、中国人の気持は寛大なのです。一度出現した極端な反日的行為は、ただ少数の人の衝動的な行動であって、大多数の人はそれを賛成していませんから、誇大に捉えてはなりません。

中日両国は近隣であり、2千年以上の友好交流の歴史があります。歴史が証明しているように、中日両国は和せば共に利益を得ますが、戦えば共に傷つきます。善隣友好、共利協力、共同発展こそ両国人民の長期の根本的利益と合致します。最近の安部晋三新首相の訪中と中国指導者との会談は、中日関係の変化の兆しです。これが中日両国関係の改善と発展の新しいスタートとなりうることを、我々は希望しています。我々は、両国人民の交流、意思疎通、相互理解をさらに強化し、中日関係が健全で安定したものとして発展するよう推進しなければなりません。